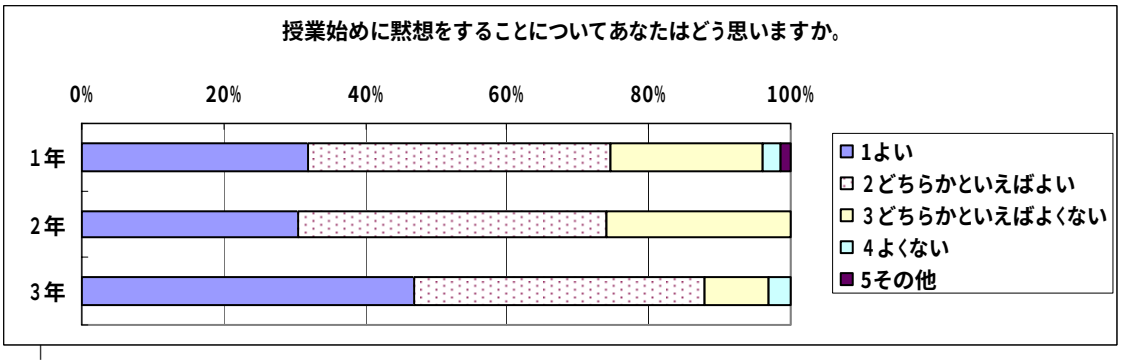
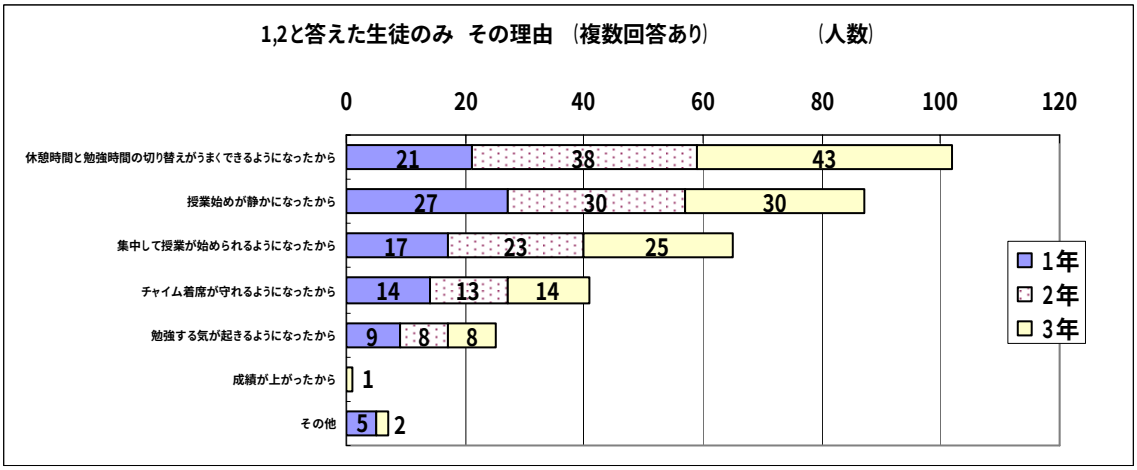
## 成果と課題（全体の取組を通して）

（１）仮説①について

①　よりよい学習環境をつくるため、黙想を実施したことで、落ち着いた雰囲気の中で授業が開始できるようになった。黙想についてのアンケートを２学期末全校生徒対象で実施したところ、約 80%の生徒が黙想について肯定的に答え、その理由としては、「休憩時間と勉強時間の切り替えがうまくできるようになったから」「授業始めが静かになったから」「集中して授業が始められるようになったから」が多かった。



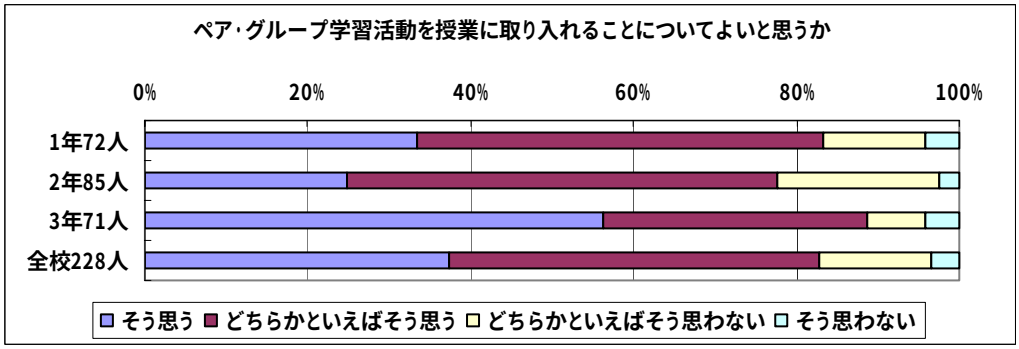



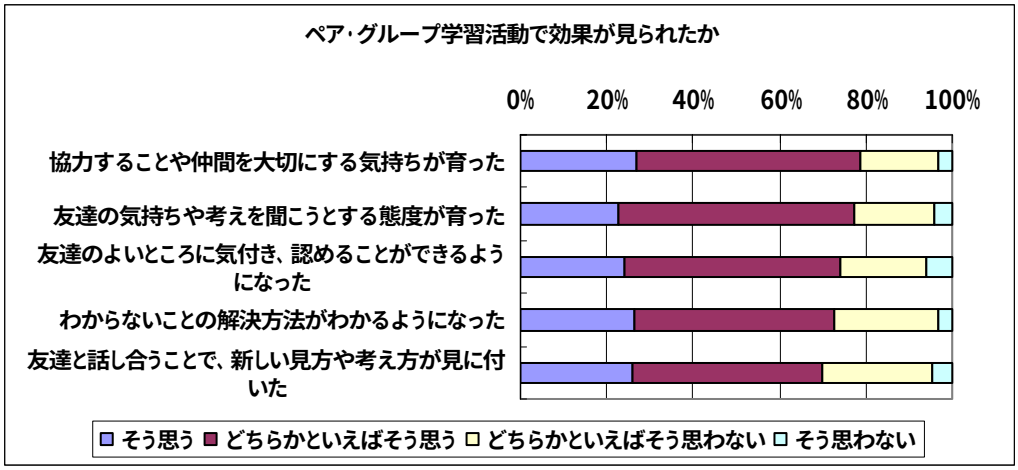

しかし、「ふざけている人がいるので徹底してほしい」「黙想しても静かにならない」と答えている生徒もいる。今後は、黙想の効果をより高めるためには、皆で協力しなければならないことを認識させる等して、共に学ぼうとする集団づくりを推進していく必要がある。

②　ペア・グループ学習活動の効果的な取入れにより、他と協力して一つの課題に取り組んだり、意見を交換したりする機会が増えることになった。それにより、友達の考え方のよさを発見したり、自分の考えを深めたりすることができるようになってきている。また、多くの生徒（１８９人）がこの学習活動の取入れについて肯定的に答えている。（アンケートは３学期実施）

《ペア･グループ学習活動についてのアンケート》

※　回答者数２２８名




しかし、ペア・グループ学習活動での課題に興味を示さない生徒や他とかかわり合うことが苦手な生徒がいることも事実である。全校で一割以上の生徒が、「友だちが自分をどう思っているかが気になり負担を感じる」(そう思う　37 人)、「友だちの様子を心配したり、気遣うことに負担を感じる」(そう思う　25 人)と回答した。今後は、より多くの生徒が興味をもてる課題提示について研究を深めていくとともに、かかわり合うことが苦手な生徒に対しては、他と接する中で自己肯定感が向上するような体験活動の取入れ、スクールカウンセラーを活用しての個別相談等、効果的な支援の在り方について検討していく必要がある。

また、ペア・グループ学習活動は、教科や単元の特性、教科担当者の指導方針により、毎時間、どのクラスでも取り入れるところまでは進んでいない状況である。4 人 1 組、男女 2 対 2 が理想のグループ編制ではあるものの、まず、「隣の人がどう考えているか聞いてみよう」、「隣の人と答えを確かめ合ってみよう」という段階から、少しずつでも学び合う学習活動を取り入れていかなければならないと感じている。

（２）　仮説②について

①　少人数やティームティーチングでの授業では、より多くの生徒に声をかけ、一人一人の生徒の学習状況をチェックできるようになったため、個に応じたきめ細かな支援・指導が可能となった。生徒からも「授業がわかりやすい」「集中して授業が受けられる」等、肯定的な声が多く聞かれている。しかし、少人数授業やティームティーチングは指導方法の一つであり、さらに有効なものにしていくためには、学校組織として教師全体の指導力の向上を図っていくことが必要である。また、一人一人の生徒の学力の弱点やつまずきの原因を把握し、個別の支援が積極的にできるよう、生徒の実態把握のためのアンケートや授業評価を今後さらに充実させていかなければならない。

②　生徒の知的好奇心を喚起し、学ぶことに喜びを感じることができるよう、教科書以外の具体的な人、もの、ことを学習に用いたり、身近な事例を導入時に取り入れる等、各教科で指導内容を工夫するように努めてきた。まだ、生徒の実態は大きく変わったとはいえない状況であるが、３年生では、昨年度と比べて「勉強が好きである」「授業がわかる」と答えた生徒が増加した。（学習や生活にかかわるアンケート結果参照）今後さらにわかる喜びを実感し、学び続けることができるような指導内容を開発していかなければならない。

（３）　仮説③について

①　３つの研究専門部を設けることで、学校組織として小学校と連携し研究を進めていくことができた。3 学期に本校教職員に「今年度のような小中連携しての研究の進め方についてどう思うか」と質問しところ、90%以上（19 名）が「よいと思う」、「まあよいと思う」と答えた。その理由としては、「小中で連携し、子どもたちを見ていくことは大切である」、「めざす子ども像に統一性が生まれ、指導に一貫性ができる」、「情報交換ができてよい」等が上がった。来年度もこの体制を継続することで、本事業をさらに円滑に進めていきたいと考えている。

②　連携することはよいことだが、各部で「確かな学力」育成のための方策を考えたり、アンケート結果などについて十分話し合う時間を確保することが難しい状況である。また、相互授業参観も日程の都合上、一部の教職員だけしか、小学校に出向けないという課題が上がっている。そのため、長期休業中を利用して各部会を開催したり、公開授業中に録画したテープの貸し出しを実施する等、限られた時間を有効に使うための工夫をしていく必要がある。また、「中学校だけのペースで研究を進められない」、「制約が多くなる」という理由から、小中連携について否定的な意見もあり、今後は、何のために連携していくかについて十分共通理解を図っていかなければならない。